

---

**福岡攻防戦！ コナンVS怪盗キッド～ CONAN IN FUKUOKA ～**

ともゆき

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

福岡攻防戦！ コナンVS怪盗キッド〜CONAN IN FUKUOKA〜

### 【Nコード】

N5991A

### 【作者名】

ともゆき

### 【あらすじ】

九州の西の玄関口・福岡。その福岡市博物館に展示されている宝石を狙う怪盗キッド。今、宿命の対決が始まる！果たして勝つのはどっちか？

第1話

その日の昼過ぎ。

米花町内のデパートにあるファーストフード店のテーブルに毛利蘭、鈴木園子、そして江戸川コナンの3人が座っていた。

今日は休日と言うこともあって、蘭と園子のショッピングにコナンが付き合わされている、と言うわけである。

そして丁度昼過ぎ、と言うこともあって昼食を取ろう、と言うことでこの店に入ったのだ。

「焼きそばとお好み焼きセットのお客様」

カウンターで店員が呼びかける。

「あ、はい！」

蘭がその呼びかけに応えカウンターで受け取り、テーブルに腰掛けているコナンたちの前に持ってきた。

「じゃ、食べよう」

そして3人が割り箸を取った。

「…はい、蘭。紅生姜あげる」

そう言うと園子は蘭の焼きそばに乗った皿に自分の焼きそばに乗っている紅生姜を乗せる。

「ちょ、ちょっと園子。そんなのいらないわよ！」

「…あれ？ 園子ねーちゃん、紅生姜嫌いなのか？」

コナンが聞く。

「そ。私小さい頃から生姜とかそういうのが嫌いなよ。あの妙な辛さが嫌いだし」

（…ははは、コイツにも嫌いな食べ物があったのか）

「…ところで園子」

蘭が話しかけた。

「なに？」

「今度の話だけど…」

「ああ、それね。明日にでも飛行機の席は取っておくし、ウチが経営しているホテルに泊まってもらうから心配は要らないわよ。とにかく一度泊まったら気に入るわよ。福岡の夜景が凄く綺麗に見られるし、福岡タワーやヤフードームも近くにあるし…」

\*

九州の西の玄関口・福岡。

その福岡の玄界灘を臨むように建っている球場と言えば、福岡Y A H O O ! J A P A N ドーム・通称「ヤフードーム」である。

そのヤフードームから程近いところにある高さ234メートルと言う堂々たる高さを誇る福岡タワーのすぐそばに建っているのが平成2年、つまり1990年にオープンした福岡市博物館である。

その福岡市博物館2階の「特別展示室」でこの度「日本にある世界の秘宝展」と言うのが開催されることになり、全国各地から数々の宝物が集められることになった。

当然と言えば当然なのだが、今回鈴木財閥にもその手の話があり、鈴木財閥もいくつか珍しい宝物を提供することになった。

で、「折角だから開催初日に福岡に行こう」と鈴木財閥の次女である園子が親友である蘭に話し、コナンにも「一緒に行かないか」と誘い、2週間後の開催初日に彼女たちは福岡に遊びに行くことになったのである。

ついでに、と言うことで他にも福岡タワーやヤフードーム、太宰府天満宮と言ったところも見物して東京に帰る予定を組んだ。

\*

2週間後、羽田空港に向かう車の中。

園子の姉・鈴木綾子が運転する車の中に蘭、コナン、園子、そして綾子と毛利小五郎の5人が乗っていた。

「いやいやホントに済みませんな。色々とお世話になって」  
助手席の小五郎が綾子に言う。

「いえ、構いませんよ」

(…おいおい、園子が誘ったのはオレと蘭だろ？ 何でおっちゃんがついて来てるんだ？)

後部座席に乗っているコナンはそう思った。

そう、蘭とコナンがショッピングから帰った夜にどこで聞きつけたのか、蘭とコナンが福岡に出かける、と言うことを知った小五郎が「自分も連れて行け」と言い出したのだ。

どうしていいか困った蘭が園子に相談すると「別に構わない」と言う返事を貰い、こうして小五郎も一緒にいる、と言うわけである。

駐車場に一台の車が停まった。

中から蘭、コナン、園子、そして園子の姉の鈴木綾子と毛利小五郎が降りてきた。

「忘れ物しないでね」

園子が全員に言う。

そして後ろのトランクから一行の荷物を降ろし始める。

「あ、いいですよ、持ちます」

小五郎が鈴木姉妹の荷物も持つ。

そんな彼らを横目に園子が携帯電話を取り出すとどこかに電話を掛ける。

「もしもし。あ、パパ？ …うん、うん。そう。今から行くから」

そして園子は携帯電話を切った。

実は園子の両親は既に昨日福岡に行っており、後から園子たちが向かい、現地で合流する、と言うことになっていたのだ。

「さ、行こう」

そして園子を先頭に5人は空港に向かって歩き出した。

空港の中に入り、手続きをするために綾子と小五郎がカウンターに向かう。

その間、何の気なしに空港に備え付けてある時計を見る一同。

「あら、ちょっと早く来過ぎちゃったわねえ…」

園子が時計を見て言う。

そう、彼らは飛行機が出発する2時間も前に来ていたのだ。

そうしているうちに手続きを終えた二人が戻ってきた。

「おいおい、まだ出発まで2時間もある、って言うじゃねーかよ」

小五郎が言う。

「どうするの？」

「それじゃ、こうしようか。それまで売店かどこかで時間潰して、  
そうねえ…、午後1時にここに集まるっ」

園子がそう提案し、一行は一時的にばらばらとなった。

\*

そして午後1時近く。

先ほどのカウンターにはコナンたち3人と綾子の4人がいた。

「…園子、どうしたのかしら？」

蘭が言う。

「お姉さん、わかりませんか？」

小五郎がいう。

「いえ…。『ちょっと見たいものがある』って園子が言うから売店の前で別れたきりなんです」

…と、程なく

「ゴメンゴメン、待った？」

園子がカウンターに駆けつけてきた。

「全く、どこ行ってたのよ？」

「ゴメンゴメン、ちょっと色々と見てきたから。さ、みんな行くっ  
よ」

そして5人は搭乗口へ向かっていった。

\*

羽田空港から飛行機に乗って約1時間50分。

飛行機は福岡空港に降り立った。

一步空港の外に出ると、

「綾子、園子！」

一人の男が二人に声を掛けた。

「あ、お父さん」

綾子が応える。

そう、その男こそ、二人の父親であり、鈴木財閥会長の鈴木史郎だったのだ。

「いやあ、鈴木さん、お久しぶりです」

小五郎が挨拶をする。

「おお、これはこれは毛利さん、こちらこそ。実はあなたが来るのを楽しみにしてたんですよ」

「…といたしますと？」

「中洲でいい店を見つけてました。後でご案内しますよ」

「そうですか、それは楽しみですね。ハハハ」

「お父さん！」

蘭が言う。

「ま、とにかく乗ってください。福岡市博物館にご案内しますよ」  
一行の目の前には一台のワンボックスカーが停まっていた。

\*

そして福岡空港から車を走らせ、福岡市博物館近くにある駐車場に1台のワンボックスカーが止まった。

中からコナンたちが降りてくる。

「あれが福岡市博物館ですか…」

小五郎が言う。

博物館と言われなければ外国の会議場か何かと思えるような建物が彼らの目の前に建っていた。そして話に聞いたとおり、近くには福岡タワーが博物館を見下ろすように建っていた。

「あ、鈴木史郎様…、ですね？」

博物館に入ろうとした時、一人の男が史郎に近づいてきた。

「…この方は？」

「ああ、この福岡市博物館の副館長だそうだ」

「申し遅れました。私、副館長の宮城、と申します」

宮城と名乗ったその男は小五郎たちに頭を下げた。

\*

「…こちらが常設展示室です」

宮城副館長の案内で常設展示室の前にやってきたコナンたちは受付で入場券を買って中へと入っていった。

室内には何人が先客がいたのだが、咳一つするのとはばかられる位静かだった。

室内には教科書やTVで見た数々の歴史的な石器や土器、書状などが置かれてあった。

中でも彼らの目を引いたのは…

「あ、コナン君、見てみて。金印よ」

蘭があるケースを指差した。

そう、その中には国宝にも指定されている「漢委奴國王」の文字が刻まれた金印が置かれてあったのだ。

「思ってたより小さいんだな…」

小五郎がつぶやく。そう、その金印は2・3センチ×2・2センチと言う大きさだから彼らが想像していたよりも小さなものだったのだ。

「ええ、ここに来た皆さんはそう言いますよ」

副館長の宮城がいう。

\*

そして常設展示室を一回りして出ると小五郎が、

「…ところで副館長。その秘宝展というのは…？」

「ああ、それですか。ここの向かい側に特別展示室というのがあるんですが、明日から1ヶ月にわたってその特別展示室で行なうんで

すよ。鈴木財閥さんにも貴重な宝石や彫刻をいくつかご提供いただきましたし。…よかつたらご案内しますよ」

そして副館長の案内で特別展示室に向かう一行。

「…本来だったら入場料を戴くんですが、まだ準備中ですので、そのまま入って構いませんよ」

特別展示室の中には係員が忙しく動いていた。

いよいよ明日初日ということで準備も最後の追い込みになっているのだろう。

室内に置かれたショーケースには既にいくつかの宝物が設置されている。

「鈴木財閥さんからご提供いただいた宝物は今回の秘宝展の目玉でもあります。あそこに展示する予定です」

そして副館長はあるショーケースを指差した。

「しかしこれだけ展示するとなると警備の方も大変でしょう」  
小五郎が言う。

「確かにそうですね。一応福岡県警の方にも協力をお願いしていますし、我々としても考え得る限りの警部網を敷くことにしていますよ」  
そしてこれ以上邪魔になつてはいけない、と思つたのか、一行は早々と退散した。

\*

そしてホテルにチェックインするために福岡市博物館を出た時だった。

「…コナン君、どうしたの？」  
蘭が聞いた。

そう、さつきからコナンは福岡市博物館の正面玄関のほうをじつと眺めていたのだ。

「ん？ い、いやなんでもないよ」  
そしてコナンは歩き出した。

(…なんか気になるんだよなあ…)

コナンはワンボックスカーの中で外の景色を見ながらそう思った。

そう、コナンの脳裏に「アイツ」の姿がチラついてたのだ。

(…これだけの秘宝展なんて滅多に行なわれるものじゃないし…、もし「アイツ」がこの情報を知っていたとしたら、何かしら動いていてもおかしくないはずだよな…)

そんな事を考えてる時だった。

「…君、コナン君？」

蘭の声がした。

「あ、どうしたの、蘭ねーちゃん」

「ホテルに着いたわよ」

見ると、他の者たちは車から降りて荷物を降ろしているところだった。

「え？ もう着いたの？」

「そ、忘れ物しないでね」

そしてコナンは車を降りた。

\*

「ホント、綺麗ね」

夜、ホテルの一室から福岡の夜景を眺める蘭。

確かに園子の言ったとおり、目の前には福岡の夜景が広がっていた。

コナンはその夜景を眺めながら「アイツ」の事を考えていた。

どうも「アイツ」が既に動いているような気がしたのだ。

(…もしかしたら、この夜景のどこかに「アイツ」が潜んでるんじゃないか…)

その時、蘭たち3人の部屋の電話が鳴った。

蘭が電話を取る。

「もしもし」

「あ、蘭？」

園子の声だった。

「園子、どうしたの？」

「ちょっと大変な事が起こったの。来てくれない？」

「どうしたの？」

「来たら話すわ。あ、それとおじさんとコナン君もお願い」

「わかったわ、すぐ行く」

そして蘭が電話を切る。

「どうしたの、蘭ねーちゃん？」

コナンが聞く。

「なんか園子に来てくれ、って言うのよ。とにかく行ってみよう。

あ、お父さんとコナン君も一緒に来てくれ、って」

「わかった」

そして3人は部屋を出た。

（第2話に続く）

## 第2話

「園子、どうしたの？」

蘭がドアをノックする。

「あ、蘭？ ドアは開いてるわよ」

そして蘭たち3人が部屋の中に入ると、そこには鈴木一家の4人がそろっていた。

「いったいどうしたの、園子？」

「あ、蘭。これ見てよ。今、パパのケータイに入ったメールなんだけど……」

そして園子が携帯電話を差し出す。

それには、

「福岡市博物館で開催される秘宝展で展示される宝石『レッドサンライズ』 戴きに参上いたします。 詳細は明日。 怪盗キッド」

と言う文章が書かれてあった。

「…これは…」

「そ、キッド様からのメールよ」

(…やっぱりな…)

コナンは思った。

この福岡で「秘宝展」が開催される、と園子から聞き、実際に福岡の地に降り立った時から怪盗キッドの影がちらついていたのだが、やはりヤツはこの機会を狙っていたのだろうか？

今回の秘宝展は全国紙の記事で、しかもコナンたちが住んでいる東京でも紹介されていたほどのニュースである。キッドが動き出してもおかしくはなかったのだが…。

「…それにしても、今度の怪盗キッドの目的はなんなのかしら…？」

「ねえ、ボクにも見せて」

そう言うとコナンは園子の手から携帯電話をひったくった。

「あ、コナン君！」

そしてコナンはそのメールを見る。

「…？」

コナンはそのメールの文章が一番下までスクロールされていないのに気がついた。

ということはまだ続きがあると言っただろうか？

コナンはその文章を下の方までスクロールさせると、こんな一文があった。

「P.S. …灯台下暗し、といいますが、福岡タワーの展望室からも入場するお客を見る事はできませんね」

(…？ 何だ、これは？)

コナンは思った。いったい怪盗キッドはどんな意味を込めてこんな一文を付け足したのだろうか？

「で、どうするの？」

蘭が言う。

「どうする、って…。とりあえず福岡県警には連絡しないといかなだろ」

小五郎が言う。

「それについてはさっき福岡県警の方に連絡は入れといたわ。すぐにそっちに伺う、って言ってたそうよ」

そして福岡県警から程なく署員たちがやってきた。

「先ほどそちらから連絡を戴いたのですが」

「あ、どうも済みません。…ここではなんですので、下のロビーで」

そして史郎が立ち上がったとき、

「済みません。私も一緒にいいですか？」

小五郎が聞いた。

「あ、毛利さんも一緒をお願いします」

彼らにコナンも着いていこうか、と思った時だった。

「…コナン君、みんなの邪魔になっちゃいけないから、私たちは部屋に戻るう」

コナンの考えを悟ったか、蘭が言う。

「う…、うん」

そしてコナンは部屋を出ようとして何気なくもう一度振り向いた時だった。

(…あれ?)

コナンは部屋の中の全員の様子に違和感を感じたのだった。

そして鈴木家の一同（&小五郎）と福岡県警の刑事たちが下の口ビールに向かい、蘭たちが部屋に戻った後の事だった。

蘭はバスルームで入浴しており、コナンはTVを見ていた。

と、小五郎が戻ってきた。

「…どうだったの？」

「いや、たいした話はしてねえ。今はまだ予告状を送りつけてきた、というだけでこれから先どうなるかわかったものじゃないからな。

明日が丁度初日だから、警戒は厳重にして、福岡県警の刑事たちにもその宝石を見てもらおう、ってことになっただけだ。これから身内だけで打ち合わせをするらしいから、途中で抜けてきた」

そして小五郎がタバコを喫おうと思ったかタバコの包みを取り出す。

しかし、その中身を見て、

「…ちっ、タバコが切れてる。一寸下へ買いに行つて来るぞ」

「うん、わかったよ」

「ついでにビールでも買ってくるから。おまえらにもジュースか何

か買ってきてやるぞ」

「ありがとう」

そう言っつて小五郎が部屋を出て行ったその時だった。不意に部屋にある電話のベルが鳴った。

「…もしもし」

「あ。そちら、毛利様のお部屋ですか？」

「どうやらフロントからの電話のようだった。」

「あ、そうですけど」

「外線がかかっておりますのでお繋ぎしますね」

「お父さん、戻って来たの？」

家から持ってきたパジャマに着替え、バスタオルで髪を拭きながら蘭がバスルームから出てきた。

「うん。でもすぐに、下にタバコ買いに行ったよ」

「そう。…それより、コナン君。誰かから電話、あった？」

「…ん？ な、なんでもないよ」

「そう？ なんか話している声が聞こえたんだけど」

「そ…、その…。阿笠博士からだよ。ボクが福岡に遊びに行く、って言ったから心配して電話かけてきたんじゃないの？」

「そう」

そう言っつと蘭はベッドに腰掛けるとコナンと一緒にTVを見始めた。

(…やべえやべえ。まだ蘭には「あの事」は話さない方がいいな…)

\*

翌朝。

「蘭、いる？」

部屋の外で園子の声が聞こえた。

「あ、ちょっと待ってて」

そして蘭が部屋のドアを開けると、そこに園子と綾子の二人が立

っていた。

「なに？」

「ん？ 今から博物館で秘宝展見て、ついでにヤフードームや福岡タワーの見物に行こうと思ってるんだけど、行く？」

「分かったわ。支度してからいくから待ってて」

そしてコナンたち3人と鈴木姉妹の5人は駐車場に泊まっている車（昨日コナンたちが空港から乗ってきたワンボックスカーだった）に乗り込む。

園子が言うところだと、まず、福岡市博物館で今日から開催される秘宝展を見物した後にヤフードームや福岡タワーを見物してホテルに戻ってくる予定だ、ということだった。

既に両親はオープニングセレモニーに出席するために博物館に行っている、ということだった。

\*

昨日とはうって変わって福岡市博物館は大勢の入場者でにぎわっていた。

やはり初日、と言う事もあるのだろうか、来場者のほとんどが2階の特別展示室の方に入っていく。

コナンたちもそれを見て特別展示室の方に入ってしまった。

特別展示室の中はかなりの混雑で、さらには警備員の姿もあちこちで見られる事もあってかゆっくりと立ち止まって見ている余裕は感じられなかった。

とは言え、中に展示されている数々の展示物は「秘宝展」の名にふさわしく数々の見た事のないような宝石や陶磁器が置かれていた。

「日本にはまだまだこんなにお宝が残ってたんだな…」

半ば感心したように小五郎がつぶやく。

「あ、お父さん、見て見て。アレよ」

蘭が指差した方向は人だかりがしていた。

そこに行くと、そこには「宝石『レッドサンライズ』 鈴木史郎氏所蔵」と言う説明文と共に、大きなルビーの宝石が台座に乗っていた。

「レッドサンライズ」の名にふさわしく、太陽を思わせる赤色だった。

「…やあ、来てましたか」

コナンたちの背後で声が聞こえた。

コナンたちが振り返ると、昨日も会った宮城副館長がその場にいるのだった。

「ああ、これは宮城さん」

小五郎が言うと、宮城副館長は、

「…済みません、ちよつとこちらへ」

と、一同を離れた場所へと案内した。

「…お話は鈴木史郎様や福岡県警の方々にお聞きしました。怪盗キッドがここに展示してある鈴木様所蔵の宝石を狙っているそうですね」

「ええ。まだ詳しい予告とかは送っていないのですが、狙っているのは確実のようです」

昨日の捜査会議に一緒に出ていた小五郎が言う。

「そうですね…。いや、我々も福岡県警から話を聞いて、警備員の人数を増やしたり、監視カメラを増設したりで対応はしているんですが、何分怪盗キッドがどのように出てくるか分からないままではこれ以上の警戒の仕様がなくて…。いや、お客様に余計な不安を与えたくないためにこの事を知っているのは私や館長と一部の者だけなんですけどね」

まあ、確かに催し物が催し物だから、例え怪盗キッドが相手でないにしろ、これだけの警備も当然だろうが、やはり相手が相手だけに念を入れる、ということだろうか。

「…まあ、とにかく警備の方は嚴重にする事ですな」  
「解っております」

そして特別展示室を一回りした一同は次の目的地である福岡タワーに向かった。

\*

福岡タワーに昇って福岡市を一望した後、一同はヤフードームへと向かった。

ヤフードームでは今日はプロ野球の試合も他のイベントもないのだが、見学ツアーが組まれているのか結構人が来ていた。

球場のあちこちには「FUKUOKA Soft Bank HAWKS」のフラッグが翻り、スピーカーからは、

いざゆけ 無敵の若鷹軍団 いざゆけ 炎の若鷹軍団

我等の 我等の ソフトバンクホークス

と、ここを本拠地とする福岡ソフトバンクホークスの応援歌「いざゆけ若鷹軍団」が聞こえてくるのがホークスが福岡の球団だと言うのを感じさせる。

「…そういえばさ、園子」

蘭が園子に話しかける。

「何？」

「ヤフードームって屋根が開閉式なのに、何で天気がいい日は屋根を開けて試合しないんだろっね？ TVで見たことあるけど、メジャーリーグの球場は天気がいい日は開ける事が多いでしょ」

「…うん、昨日もホテルに行く途中で見たでしょ？ ドームの近くに病院があつて、それで騒音なんかの影響があるらしいわよ。それに…」

「それに？」

「一回屋根開閉するのに100万円かかる、って話だつて」

「ふーん、それじゃそう開けられないわね。でもなんか勿体無いなあ…。これだけ立派な建物なのに…」

「…でもよ、これだけのスタジアムで野球やコンサートが出来るなんて凄いものじゃねえのか？」

小五郎が言う。こうして自分の目で見てみると、TVで見るとどよりはるかに大きく、ローマのコロッセオを思わせるような外観には圧倒されるものがある。

\*

その夜。

小五郎は鈴木史郎に誘われ、中州で史郎が見つけた、という飲み屋に出かけ、園子は「折角博多に来たんだから名物のとんこつラーメンでも食べよう」と蘭とコナンを誘い、3人で博多のあるラーメン店に入っていた。

「お待ちどうさまでした〜」

3人の目の前に博多名物のとんこつラーメンが置かれた。

もちろん、チャーシューや万能ネギ、紅生姜やゴマといった具がたっぷりと乗せられている。

「…これが本場のとんこつラーメンか…。一度福岡で食べてみたかったのよね」

「そう、よかった。早速食べようか」

「うん。…いただきます！」

そして3人は食べ始めた。

「あゝ、おいしかった」

園子が丼を置く。3人ともスープまで飲み干したか、丼の中はすっかり空となっていた。

「おいしかったね、コナン君」

「うん。東京なんかで食べるのとは全然違うね」

「そう、それはよかった。…あ、お金は私が払っとくから二人とも

先に出てていいわよ」

そして蘭とコナンが店を出た。

園子がレジでお金を払っているのが外からでもわかる。

そんな園子をコナンはじっと見ていた。

「…？ どうしたの、コナン君？」

コナンの様子を変だと思ったのか蘭が話し掛けた。

「ん？ いや、なんでもないよ」

やがて

「お待たせ」

そう言いながら園子が店から出てきた。

「…これからどうする、蘭？」

「…そういえば、この近くにキャナルシティってショッピングモールあったわよね。そこで買い物したいんだけど」

「分かったわ。じゃ、一緒に行こう」

そして3人は連れ立ってキャナルシティへと向かった。

\*

そしてキャナルシティからホテルに戻った時の事だった。

小五郎はまだ帰ってきてないようで、蘭とコナンは二人で部屋のテレビを見ていた。

「…君、コナン君！」

蘭がコナンに話しかける。

「あ？ な、何？ 蘭ねーちゃん」

「さっきから何考えてるの？」

「え？ べ、別に何も考えてないよ」

「…そお？ もしかして、怪盗キッドのこと考えてたんじゃないの？」

「え？」

「隠さなくてもいいわよ。実は私も同じ事、考えてたんだから」

「そ、そう？」

「うん。…ねえ、コナン君。もう怪盗キッドも福岡に来ているのかしらね？」

「それはわからないよ。だって怪盗キッドは神出鬼没の怪盗なんですよ？」

「それはそうなんだけど…」

そう言つと蘭は窓辺に近づいた。

窓の外には福岡の夜景が広がっている。

「この夜景のどこかに怪盗キッドは潜んでいるのかしら？」

その時、蘭の部屋の電話のベルが鳴った。

蘭が電話を取る。

「…もしもし、あ、園子？ …え？ うん、うん。すぐ行く」

そして蘭は電話を切る。

「…どうしたの？」

「園子から電話があつて、園子のお父さんの電話に怪盗キッドから予告のメールが届いたらしいわ。お父さんにも見せたらしいんだけど、お父さん酔っ払つてて何がなんだかよくわからないみたいで、園子のお父さんが園子のケータイに転送したらしいわ」

「じゃあ…」

「園子のお母さんが福岡県警の刑事さん呼んだらしいけど、園子が部屋に着て欲しい、って言ってるから、行ってみよう」

「うん！」

そう言つとコナンは蘭と共に部屋を出た。

（…いよいよ、勝負の始まりか。今度こそ逃がさねえぜ、怪盗キッド…）

（第3話に続く）

第3話

「…で園子、その怪盗キッドのメールってのは…」

園子から電話を受け、部屋に来た蘭が問いかけた。

「ああ、それね。ここにあるわよ」

そういつと園子は携帯電話を蘭の目の前に差出した。

「明日夜8時、福岡市博物館にて展示中の宝石「レッドサンライズ」を戴きに参上いたします 怪盗キッド」

という文面が描かれていた。

「…やっぱりキッドは福岡に来てたんだね」

そのメールを見てコナンが言った。

実際に予告が送られてきたことに対して彼女達が困惑しているのは、園子の後ろにいる綾子の不安な表情からでも読みとれた。

「…それで、どうしたの？」

蘭が園子に聞いた。

「…うん。この予告が私のケータイに転送されてすぐに福岡市博物館にも聞いてみたんだけど、博物館のほうにもこれと同じ内容の文章がネットを通して送られたらしいわ」

福岡行きが決まってから園子に頼んで福岡市周辺をネットで調べてもらっていたのだが、園子が言うには福岡市博物館に限らず、そういった博物館などの公共施設のホームページには「お問い合わせ」という形でメールフォームが設置されていることが多いそうである。となると、おそらく怪盗キッドはそれを使って博物館にメールを送ったであろうことは容易に想像できるが。

「…それで、それからどうしたの？」

「大丈夫。そのあと福岡県警の方にも連絡を入れたし、パパもすぐ戻ってくるって。…でもさっきも言ったけど、おじさん酔っ払って

るらしいから」

「解ってるわよ。酔いが醒めたら私のほうからお父さんに言っておくわ」

「お願い」

そして程なく、小五郎を連れて史郎がホテルに戻ってきたのと同じ頃に福岡県警の刑事達がホテルへとやってきた。

「…じゃ、蘭。またあとで」

「うん、解ったわ。…ほら、お父さん、しっかりして！」

そういつと蘭は小五郎に肩を貸す。

小五郎は完全に出来上がっていたようで足取りもおぼつかない。

この様子だとおそらく中洲で浴びるほど飲んできたのだろう。

(…やれやれ、この場で眠ってもらおうか?)

コナンは右手にしている腕時計型麻醉銃をチラリと見る。

\*

そして翌朝。

「…ねえ、コナン君」

蘭がコナンに話しかけた。

「ん？ どうしたの、蘭ねーちゃん」

「園子知らない？」

「ボク知らないけど、どうしたの？」

「なんか、お姉さんが朝起きたらどこにもいないんだって。それで私達の部屋に遊びに来たか、ってお姉さんが言ってきたんだけど、こっちは来てないしねえ」

「…どこ行っただらうね？」

そして、ホテルの近くにあるコンビニエンスストアで朝食を買いおつかと思って1階に降りてきた時、不意に園子と鉢合わせた。

「あ、蘭、どうしたの？」

「どうしたの、じゃないわよ！ お姉さんがどこ行ったのか心配し

てたのよ」

「ああ、ゴメンゴメン。ちょっと早く起きちゃったから、散歩でもして来ようかと思ってちょっとその辺歩いてたの。…ついでに朝ごはんも買ってきたし」

そういうと園子は蘭たちにコンビニの袋を見せる。

「…まったくもう…。お姉さんにちゃんと云つとくのよ」  
「解ってるって」

そして園子はエレベーターに向かった。

その様子をじっと見ているコナン。

「…コナン君どうしたの？」

「ん？ な、なんでもないよ」

\*

そして朝食を済ませたコナンたちは 怪盗キッドからの予告状が届き、しかもその標的が自分たちの持っている宝石だった、ということもあつたのだろうか、福岡市博物館から連絡を受け、昨日と同じく園子たちと一緒に福岡市博物館へとやってきていた。

福岡県警から警官隊が駆けつけ、博物館側も警備員を増やした事から、福岡市博物館は昨日とは比べ物にならないほど、早朝から物々しい警戒体制を敷いていた。

更に「考え得る限りの手段を講じる」ということで入館は正門に限り、更に入館者には手荷物検査やあらかじめ設置してあった金属探知機のゲートを潜り抜けて入館する、という空港のそれ並みに厳しい警戒だった。

「…それにしても」

コナンは福岡市博物館にいる警備員や警官を眺めてつぶやいた。

「…ヤツの予告は夜だったのに朝っぱらからなんなんだ、この嚴重な警戒は？」

「…でもこれでキッドに宝石を盗まれたら警察の面目が丸つぶれだ

しね」

蘭が言う。

「そりゃそうだけど…」

やはり自分達の持っている宝石が狙われている、ということもあるのだから、鈴木家の面々もどこと無く落ち着かない様子だった。

「…そういえば、さっき福岡県警の人に聞いたけど、警視庁から二課の中森警部も午後の飛行機で福岡に駆けつける、という話らしいな」

小五郎が言う。その小五郎もさすがに昨日の晩に関しては記憶が飛んでしまっていたようで、今朝になって始めて話を聞いたところだった。

さすがに相手が相手だけに今回の件に関しては警視庁にも連絡が行ったようだ。

「…とにかく中に入ろうよ」

園子が言う。

そして一行は中に入った。

キッドが予告を送りつけてきたのは今朝の新聞やテレビで報道されていたから、それに対する興味もあつてか、昨日も結構来場者がいたが、今日は見る限り昨日を上回る来場者のようだった。

そしてほとんどの客はキッドが狙っていると言う宝石が展示してある特別展示室の方へと入っていく。

結局コナンたちは時間が来るまでもう一度福岡市博物館の展示物をじっくりと見るはめになってしまった。

ある展示品を見ていたときだった。

「…あれ？」

なにやらコナンがある椅子に座っている博物館員となにやら話しているのを見かけた。

髪が長く、背中を向けている事から顔はよくわからないがどうや

ら女性らしいが…。

「コナン君！」

蘭が呼びかける。

「あ、今行くよ！」

そしてコナンは蘭の元に駆け寄る。

「…何あの人と話してたの？」

「…あの人、って？」

「ほら、あそこに座っている女の人」

そういうと蘭は椅子に座っているさっきの女性博物館員を指差した。

「あ、…うん、ちょっとね。色々と展示品について聞いてたんだ」

「ふーん…」

\*

午後4時30分を回った頃、一台のパトカーが博物館前に到着した。

中から一人の男が降りてくると、ひとりの刑事がその男を出迎えた。

「あ、中森警部、お待ちしておりました」

そう、その男こそ警視庁捜査二課の中森銀三警部だったのだ。

「ご苦労様です」

「いえ、こちらこそ。ここで話もなんですから、こちらへどうぞ」

そして中森警部を警備室へと迎え入れた。

警備室の中には何人もの刑事や警官が詰め掛けていた。

「どうもどうも、中森警部。お忙しいところをわざわざ遠路はるばるお越しいただきまして」

「いや、ヤツが福岡にまで足を伸ばしたと聞いては黙っておられませんか。話を聞いてすぐに飛んできましたよ。…ところで、警視庁に掛かってきた電話で話は聞きましたが、キッドのヤツが今夜宝石を盗みに来ると予告があったそうですね」

「ええ。それに聞いた話だと、中森警部は鈴木財閥の事もよくご存知だとか」

「幾度かヤツか鈴木財閥の宝石を狙った事がありますからな。…とところで宮城さん、とか言いましたな」

中森警部が副館長の宮城に話しかける。

「え？ ええ、なんででしょうか？」

「…警備の方はどうなっとりますか？」

「…私どもは福岡県警の方にお任せしておりますから…。ただ、県警の皆さんのご指示に従って考え得る限りの警備は敷かせていただきますが」

「…見せていただけますか？」

「今はちよつと来館者もおられますし、準備もまだ終わっておりませんので、閉館後で構いませんか？ あと1時間もすれば閉館ですので」

「それは構いませんが」

それから間もなく閉館時間の5時半となり、来館者が帰った後、福岡市博物館の中には県警の刑事たちと博物館の一部関係者、そして中森警部と「閉館後も残って欲しい」と言われたため、館内にいたコナンたちが残るだけとなった。

特別展示室の中に宮城副館長と中森警部達が入る。

「…今回、怪盗キッドが狙っているのはあの宝石らしいんですが…」

「…そういうと宮城はショーケースの中にある一つの宝石を指差した。

中森警部がそれに近づく。

「…ほほお、この宝石を盗む、と予告してきたんですか」

「…そういいながら中森警部はショーケースの周りを回りながら宝石を眺める。

「…はい」

「…そう、その宝石「レッドサンライズ」は朝日を思わせるかのよう

な鮮やかな赤い色をしており、宝石が赤い色をしている、ということもあるのだろうか、数々の展示品でも一番目をひく感じがした。

「…この宝石は今回の秘宝展の目玉、とでも言っていていい展示品です。来館者の皆さんもほとんどの人がこの宝石の前で足を止めて見入っていますよ」

「…それで、警備の方はどうなつとるんですか？」

中森警部がそういつた話にはあまり興味がないのか、一通り宝石の入ったショーケースを見回すと、福岡県警の刑事に聞いた。

「ええ、防犯カメラを倍の数に増やしましたし、出入口には警官を2名ずつ配置します。それから防犯センサーも作動チェックを何度も行なつて、ちゃんと作動する事は確認しています」

「…そうですか」

「今は電源を切っておりますけど、この防犯センサーも赤外線を利用して、何者かが、このケースの周囲1メートル以内になつくと作動する仕掛けになってますし、念のために警備員の他にも何名かの職員に残ってもらつて、特別展示室と常設展示室両方を見張つてもらつるように博物館側をお願いしてもらっています。館長と副館長も今夜は博物館に泊まりこむそうです」

「…わかりました」

「それと、博物館周辺にも警官を配置しますし、何のために福岡タワーやヤフードーム、シーホークホテルと言つた場所にも警官を配置します」

「それはすみませんな」

「いやあ、相手が相手ですからね。これくらいの警戒はしないといかんと県警の方でも言っています」

「…まあ、そうですね。ただ、気をつけてくださいよ。ヤツは変装の名人でもありますからな。既にこの中に紛れ込んでいるかも知れませんか」

「…それは警視庁の方からも話は聞いています。ですので我々も常に二人一組で行動していますので、その辺は心配ないと思います」

…」

\*

そして警報の点検をしたり、あちらこちらの見回りをしているうちにいつの間にか夜7時半を回っていた。

普段は電気が消される博物館周辺も今日は室内に煌々と明かりが点けられ、外はサーチライトが博物館周辺を明るく照らしていた。

コナンたちと鈴木一家は館長たちの計らいで、閉館後も警備室の中にいた。

モニターの中には宝石の入ったショーケースが一番目立つモニターに映っており、後数台のモニターで博物館内の様子が次々と映し出されていった。

怪盗キッドが狙っている宝石は特別展示室に展示してあるのだが、福岡県警の警官達は念のために、ということとで常設展示室や1階のロビー、正面玄関にも人員を配置し、さらには博物館側も何人かの博物館員をあちらこちらにおいていた。

「…異状はないか？」

「ハイ、今のところ以上はありません」

…と時々無線のやり取りが聞こえてくる。

「…今のところは異状はないようです」

「…このまま何も起こらなければいいんですが…」

そして何気なくそこにいた何人かが警備室においてある時計を見る。

もうすぐ夜の8時になろうとしていた。

そして夜8時になったときだった。

突然、館内の電気が消え、あたり一面が真っ暗になった。

「…どうした、停電か？」

慌ててそこにいた全員が辺りを見回す。

しかし博物館周囲の電気はついている。

そして程なく再び電気がつき、室内は明るくなった。

そこにいた全員が、ホッと胸をなでおろす。

しかし、それもほんの一瞬でしかなかった。

「…あっ！」

警備員室のモニターを見ていたひとりが素っ頓狂な大声を上げた。

「どうした？」

「宝石がありません！」

「何？」

そして全員がモニターに集まる。

そう、そのショーケースにほんの1分前まであった宝石が跡形も無く消えうせていたのだ。

そしてショーケースの中には

「宝石『レッドサンライズ』確かに戴きました 怪盗キッド」

というメッセージカードが置いてあるだけだった。

「…キッドだ！ 怪盗キッドが現れた！ 至急非常線を張れ！」

中森刑事の声が警備室内に響いた。

（最終話に続く）

最終話（DCNバージョン）

一瞬の停電の後、怪盗キッドに宝石を盗まれた、と言うこともあって福岡市博物館内はあつという間にパニックに陥ってしまった。

福岡県警の刑事達の指示で直ちに福岡市内に非常線が張られ、ヤフードームや福岡タワーに詰めていた警官達にも次々と指示が与えられていく。

そして程なく、全ての配置が終了した、との連絡を受けた中森警部をはじめとする刑事達はそこにいた刑事や警官たちに後を任せると再び特別展示室に入ってしまった。

そのあとを鈴木一家とコナンたちが付いていく。

特別展示室の前には変わらずに二人の警官が立っていた。

「…だれも通してないか？」

「はい、誰も通していません」

そしてそこにいた一同が特別展示室に入っていくと、既に何人も警官たちが現場検証をしていた。

「…何か異常は？」

中森刑事が近くにいた警官に聞いた。

「いえ、今のところ何も異常は見当たりません」

「そうか。…ん？」

中森刑事は今しがた自分達が入ってきた特別展示室のドアを見る。何が起きたのか、といつの間にか常設展示室にいた博物館員が集まってきたいて、特別展示室の中を覗いていた。

「…君達は持ち場にもどれ！」

宮城副館長が言つと、あたふたと博物館員は常設展示室に戻っていった。

そんな中、一人の長髪の女性博物館員がいつまでもじっと中を見ていた。

「君も戻れ！」

宮城副館長が言うと、ようやくその女性もその場を立ち去った。

一同は宝石が入っていたショーケースの周りに立っていた。

中をよく見ようと中森警部が近づこうとするが、

「…あ、赤外線センサーがあつたんですな」

「いえ、大丈夫です。もう電源は切つてありますから」

それを聞いて安心したか、中森警部はショーケースに近づいた。

ショーケースの中はつい今まであつたはずの宝石が跡形も無く消え去っていた。

「…いつたいどうやって盗んだんでしょうか？」

宮城副館長がショーケースを見て言う。

「…本当にセンサーは作動してたんだろうな？」

中森警部が警備員室から着いてきていた警官に聞いた。

「…はい。間違いなく作動していました」

「停電が起きたときに赤外線センサーも落ちた、と言うことは？」

「いえ、そのときは非常用電源が作動するようになっていきますから、センサーが落ちる、と言うことはありません。ただ…」

「ただ？」

「丁度電気が消えたとき、非常用電源に切り替わっていませんでしたよ」

「切り替わっていない？」

「ええ、ですからあの停電は何者かが一時的に電源を切ったのではないか、と思われるのですが」

「…となると、ヤツの仕事か…」

中森警部がつばやいた。

\*

そんな中、コナンは一人ショーケースを見ていた。

(…一瞬の内に宝石が煙のように消えてしまうなんてことあるはずがない。…きっとこれは何らかの形でトリックがあるはずなんだ！)

コナンはそう思いながらショーケースを隅々まで眺める。

(ヤツが…、怪盗キッドがもし何らかの形で宝石を盗んだとすれば、これまでのやり方でもわかるとおり、何らかの細工を加えているはずだ。その細工の跡が見つかればいいんだが…)

そしてコナンが何気なく宝石のあった台を見たときだった。

(…これは?)

よく見ると宝石が置いてあった台の周りになにやら四角い切り込みのようなものが見えた。

(…なんだ、これは?)

コナンはじつとそれを見ていた。

そのとき、彼の脳裏にある閃きが走った。

(…そうか、わかったぜ。何でこんな単純なことがわからなかったんだ…)

そして回りを見回す。

(あとは…、と)

「園子ねーちゃん、ちょっと」

そう言いながらコナンは警察の現場検証の様を見ていた園子に近づいた。

「…? どうしたの、コナン君」

「ちょっと話があるんだ」

「…なに? 私に話、って?」

「…ここじゃちょっと…、外に出てくれないかな?」

「…蘭に言っておこうか?」

「…あ、いや、その、蘭ねーちゃんには内緒の話なんだ」

「ふーん、…わかったわよ」

そう言つとコナンと園子はそつと博物館を出た。

「…あれ? コナン君は?」

蘭が辺りを見回して言う。

そう、さつきまでいたコナンがいつの間にかいなくなっていたのだ。

「…そういえば園子もいないわね」

周りを見回して綾子が言う。

「…どこ行っただらろう、あの二人」

\*

福岡市博物館を出た二人は、福岡タワーの方に向かって歩いていった。

「…ねえ、コナン君。こんなところまで来て話、って何よ？」

そう、博物館を出てから、コナンは何も園子に話をしなかったのだ。

「ん？ 宝石がどこにあるかわかったんだ」

「え？ 宝石は怪盗キッドが持つて行っただんじゃないの？」

「いや、正確に言うと怪盗キッドはまだ宝石を持つてっていないよ、持つてっていない？ どういうこと？」

「言ったとおりだよ。まだあそこに宝石があるってことなんだ」

「まだある、って…、どういうこと？」

「なあに、簡単な事だよ。あのショーケースの中にキッドはちょっとした細工を施しただけなんだ」

「…その細工、って何？」

「簡単さ。あのケースにあらかじめ宝石がある周りの部分だけ裏返るようになってたんだ。そして怪盗キッドは予告した時間になって停電を起こして、そのショーケースの装置のスイッチを入れてその部分が裏返したんだ。停電を起こしたのはみんなの気をそらすため仕掛けがばれないようにするためでもあったんだよね」

「…じゃあ、あのショーケースを調べればまだ宝石がある、ってことね」

「そういうことだね。でも、それより大切なことがあるんだ」

「大切なこと？」

「ああ。怪盗キッドは既にあの中に 福岡市博物館の中に変装し

ていたんだよ」

「じゃあコナン君は…」

「ああ、もう誰がキッドの変装かもわかったんだ」

「…それじゃあ、何で私に話したの？ 警察の人に言えばいいじゃないの？」

「…一番初めに話したかったんだよ、園子ねーちゃん。…いや、怪盗キッドさんよ」

「ちょ、ちよつとコナン君、冗談はやめてよ。コナン君、いつからそんな冗談が好きになつたの？」

「冗談じゃねーよ。オメーは最初からオレたちと一緒にいたんだよ。でも、オレたちが気づかなかつただけさ。ある時点まではな」

「ある時点？」

「ああ。オレたちが福岡に到着した日の夜の事だった。園子から電話がかかってきたんだよ。『誰かに襲われて飛行機の子ケツトを盗られた。もしかしたら怪盗キッドかもしれないから気をつける。自分は新幹線に乗ってようやく博多駅に来たところだ』ってな。…勿論、それを聞いたときはオレも信じられなかつたさ。園子が何らかの形でオレたちを担いでるんじゃないか、とも思つたんだ。でもな、あるきつかけがオメーを偽者の園子だと確信させたんだよ」

「…その、確信、ってなんなの？」

「オレと蘭とオメーでんこつラーメン食いに行ったときだよ。あの時オメーはスープ一滴残さずに全部食つただろ？」

「それがどうかしたの？」

「オメーは知らねーと思うが、園子は紅生姜が嫌いなんだぜ。福岡に来る前に蘭と園子のシヨッピングにつき合わされたオレは、昼飯を食つたために入ったデパートのファーストフード店で園子が焼きそばに乗っていた紅生姜を蘭に全部やったのを見てたんだ。…わかつたか？ あの時のとんこつラーメンには紅生姜がたっぷり乗つてたんだぜ。本物の園子だったら残すか、蘭に紅生姜をやっ

たはずさ」

「え……」

「……そうだろう？ どんなに変装した相手になりきったところで食べ物好き嫌いまで変わるはずがない。オメーが園子が紅生姜が嫌いだ、と言っ事を知らなかったばかりに墓穴を掘る結果になっちまったんだよ」

「……じゃ、じゃあ、コナン君。コナン君の言うとおり、私が怪盗キッドだとしてもよ。その、コナン君の言う『本物の鈴木園子』がどこにいるの？」

「そこにいるよ」

「え？」

そして辺りを見回すと、そこには一人の女性が立っていた。

よく見ると「福岡市博物館」のネームプレートを胸にしている。

「何言ってるの、コナン君。博物館の人じゃないじゃない。大体なんで博物館員がここにいるの？」

「……もういいよ、園子ねーちゃん」

「え？」

「……全く、キッド様がよりによって私に変装するなんて」

いきなりその女性博物館員が園子の声で話した。

「そ、その声は……？」

その女性博物館員はいきなり頭に手をやると、いきなり髪の毛を団体で抜いた。

そう、そこにはいつもどおりに髪の毛をヘアバンドでまとめた園子が立っていたのだ。

そして彼女が持っているのはかつらだった。

「く……」

「びつくりしたよ、園子ねーちゃんから電話がかかってきた時」

「そう、空港の職員らしき人に声掛けられたと思ったらいきなり何かがされるんだもん。気がついたときは車の中に閉じ込められてさ。航空券も何も全部取られちゃって。みんな飛行機の中だから電

話もできないし…。幸い、車の中に小銭が残ってたから、それでタクシー呼んでひとまず家に戻って、お金を用意して、飛行機のチケット取れなかったから新幹線で来たんだけど…。久しぶりだったわ、新幹線で博多まで来たの、って。で、とにかく蘭に知らせよう、と思っただけでホテルにかけたら、コナン君が出てきたんだよね」

「うん。それを聞いて、もしかしたら怪盗キッドが園子ねーちゃんに変装して紛れ込んでるんじゃないかな、と思っただけ。園子ねーちゃんと相談してこのことは二人だけの秘密にして園子ねーちゃんに来てもらってたんだ」

「そ。コナン君だったら『このことは誰にも話すな』って言うんだもん。おかげで蘭にも話せなかったし、パパやママにも話せなかったし…」

「それは園子ねーちゃんには悪かったと思うよ。でも、怪盗キッドを捕まえるためだもん。仕方なかったさ」

「…さすがだな。よくそこまで見破ったぜ」

いきなりコナンのすぐそばにいる園子の声が男の、怪盗キッドの声に変わった。

「…やっぱりな…」

「でも、ここで捕まるわけにはいかねーんだ」

そう言うといきなりキッドは背を向けて福岡タワーに向かって走り出した。

「…やべえ！ 園子ねーちゃん、ボクはヤツを追いかけるから、園子ねーちゃんは警察呼んできて！」

「わかったわ！」

そして園子は博物館の方面に、コナンは福岡タワーに向かって走り出した。

\*

どのくらい走っただろうか、目の前に福岡タワーが見えてきた。暗闇の中でサーチライトに明るく照らされた福岡タワーが目立つ

ている。

と、不意に怪盗キッドの足が止まった。

「…やれやれ、やっと二人になれたか」

キッドが呟く。

「…じゃあ、オメー…」

「ああ。お前なら必ず着いてくると思ったからな」

そう、福岡タワーの周辺にはキッドとコナンの二人しかいなかった。

そしてキッドはいつの間にか来ていた服を着替え、白のタキシードにマント、シルクハットにモノクル（片眼鏡）といういつもの姿に戻っていた。

「…それにしても、まさかオメーが園子に変装してオレたちと一緒に行動していたとはな」

「ああ。鈴木財閥が福岡市で開かれる展覧会に宝石を展示する、と言う話は聞いていたからな。実際にどのようなものか見てみたかったんでね」

「だからって園子に変装する事はねーだろ」

「関係者に紛れ込んだほうがかえって安全だと言うものだけ。まさか紅生姜で正体がバレるとは思わなかったがな」

「…探偵つてのはそういうもんだぜ。それにしてもあんなことするとはよっぽど自信があったんだね」

「あんなこと？」

「オメーが最初にあのメールを送りつけたときだよ。オメーが園子に変装してるんじゃないか、って思ったとき、ようやくあのメールの意味がわかったぜ」

「送りつけたメール？」

「『灯台下暗し、といますが、福岡タワーの展望室からも入場するお客を見る事はできませんね』ってヤツだよ。灯台下暗し、つまり誰も自分の足元には気づかないってヤツさ。オメーもオレたちと一緒にやって行動する事で自分に疑いがかからないようにした、っ

て訳さ」

「一応ヒントをやったつもりだったんだがな。ま、あとはオメーの考え通りだ。まだ宝石はあのショーケースの中にあるから、中森警部にオメーから言っておけ。『騒がせて悪かった、とキッドが言ってた』とな」

「…それにしても、オメーも今回は随分と回りくどいことしたんだな」

「…まあな。こっちにも色々と事情があつてね」

そういうと怪盗キッドはいきなり方角を変えて走り出した。

「待て、怪盗キッド！」

コナンが叫んで追いかける。

「…やべえ、見失った」

そして回りも見回すコナン。

と、園子が呼んだのだろう、警官隊がコナンの立っているところまでやって来た。

勿論先頭は中森警部である。

「怪盗キッドはどうしたんだ？」

中森警部が言う。

「…ここまで追いかけたんだけど、見失って…」

そのときだった。

一人の警官が持っていた無線機が発信音を奏でた。

「どうした？」

「…怪盗キッドがヤフードームに現れました！」

「何ッ？」

その声を聞いた警官隊は急いでヤフードームへと向かっていった。

\*

ヤフードーム。

一応のために、という事でドーム内の照明が明るくグラウンドを

照らし出している。

その中で警官隊が次々とヤフードームのグラウンドに現れた。勿論、その後からコナンたちもついて来ている。

野球の試合などで観客が大勢入っているときとは違い、観客が全くないドーム球場と言うのは恐ろしいくらいの静寂である。

ホームベースの付近で辺りを見回す警官隊。

「ええい、キッドはどこにいるんだ！」

中森警部が叫ぶ。

「警部、あそこです！」

一人の警官が指をさした。

見るとバックスクリーンの真ん中に怪盗キッドが立っていた。

それを見た中森警部たちは一斉にキッドに向かって走り出した。

「…おやおや、中森警部。こんなところでお会いするとはね」

バックスクリーンに仁王立ちになっているキッドが、警官隊の中に中森警部の姿を見つけて言った。

「当たり前だ！ お前を捕まえるためならワシは例え地球の果てでも駆けつけるぞ！」

「…ご苦労な事ですな。しかしちゃんと捕まえることが出来ますか？」

「そう来ると思ったわい。暗闇に紛れて逃げようとするつもりだろうがな、この辺の主要な建物には全てサーチライトを用意してある。暗闇に紛れようたってそうは行かんぞ」

「…でもまだひとつ、当てられないところがあるでしょう」

「…なんだと？」

「上ですよ」

そう言うとキッドはパチン、と指を鳴らした。

「…なにっ！」

次の瞬間、キッドの傍らに一本のロープが垂れ下がって来た。

キッドはそれに捕まると上へと上がっていった。

「な、何でドームの中で…」

「…中森警部、あれ！」

コナンが指をさした方向を見る一同。

そう、いつの間にかヤフードームの天井が開いており、その開かれた天井に向かってキッドが上昇して行ったのだ。

「…しまった！ ヤフードームの天井が開けられる事をすっかり忘れておった！」

中森警部が言う。

「…天井の操作をしている部屋に向かうんだ！ 仲間がいるかもしれない！」

そして何人かの警官がグラウンドから操作盤室の方に向かっていった。

やがてキッドが暗闇に消えて行ったと同時にドームの屋根も閉じてしまった。

「キッドが逃げたぞ！ 捜せ！ 捜すんだ！」

中森警部が叫ぶが、既にキッドはかなり遠くまで逃げ去っているであろう。

「…また、逃げられちゃったか…」

思わず舌打ちをひとつするコナン。

そしてじつとヤフードームの天井を見上げていた。

操作盤室に乗り込んだ警官隊たちの報告によると、操作盤室は既にもぬけの殻だったという。

おそらく、そこに仲間がいて、ドームの天井の開閉を操作していたのであろう。怪盗キッドのことだから、仲間を関係者に変装させて操作盤室に潜り込ませるくらいは簡単なはずである。

\*

程なく福岡市博物館から、宝石が消えたと思われたショーケースの中から見つかった、との連絡があった。

今回も宝石を守る事はできた。しかし…

福岡攻防戦！ コナンVS怪盗キッド～CONAN IN FUKUOKA～

「まだまだオメーとの決着は先の話になる、ってことか…」

（おわり）

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5991a/>

福岡攻防戦！ コナンVS怪盗キッド～CONAN IN FUKUOKA～

2009年2月16日18時15分発行